

近代青年の〈精神の成型装置〉と志賀直哉文学

徐 己 才

一、「感動」のメカニズムとしての 志賀文学

青年の自我形成を主たる素材として扱っている志賀直哉の作品群は、近代の若者達にセンセーションを引き起こした。有島武郎は志賀の作品を読んだ後、満ち溢れる感動を押しえきれなかった自分を発見し、「あれ丈け強い主観の根底のある客観的序述が成立てばあれで最も自然な而して真正な意味の象徴的作品が出来上つた」と表現している。また、武者小路実篤も志賀の小説に感動したことを告白し、志賀の創作活動に大いなる期待感を表わしている。そして日本に「いい文学」を生むことの必要を感じ、その責任と義務が志賀にあることを述べている。また犬養健が志賀に宛てた一九二二年二月一日の書簡には、「今年の二月号よみなほして見て、謙作のあの日記のなかのやうな事を、今度書いたのに気づきました」と書かれていて、志賀のテキストの影響は似たような作

品を作り出したり、読者において新しい仕事への熱望を促す。

このような志賀文学への「感動」は、志賀のテキストが発表される当時から現在に至るまで志賀の文学の純粋性を裏付ける要因として利用されてきた。それを批判する論考として大野亮司¹⁾、永井義久²⁾の論がある。各々の論は、「大正五年」「大正十年」という時期に限定して「志賀神話」を形成する言説を中心に考察している。特に大野の論は大正五年前後の文壇における人格主義的言説に焦点を合わせて、『三太郎の日記』などを取り上げている。彼は志賀の作品の中で大正六年に発表された『和解』への影響を論証している。

しかし、志賀文学における「感動」は、ある時期に限定されている問題ではなく、明治末期から昭和期までの幅広い範囲で思想的な傾向を反映している。それは、従来の倫理・道徳を語る思想と西洋哲学が示している「自我」の問題を重点的に取り扱っている「人格修養」的な

思考である。そこには若者の「修養する人格」が強く示されている。小林秀雄は、志賀の「強力な自然性が人々の涙腺をうつ⁶⁾」と志賀の『和解』に対する「感動」を隠し切れない。彼は、志賀のテクストをすでに「感動的な読み物」とし、感動が得られない読者の方に問題があるように語っている。ここでは「作家の自然性」といった抽象的な言葉で「感動」の要因が示されている。それは志賀における自然性はいかなるものであろうか。志賀は彼のノートに「仕事、——人生（自然）への執着⁷⁾」という記録を残している。この記録から考えられるのは「自然」が「人生そのもの」を指していることである。

志賀は彼のテクストの中でどのような「人生」を描いたのであろうか。どのような「人生」が人々を感動させたのか。この論で注目したいのは、志賀のテクストに描かれている「修養する人格」である。テクストの主人公の倫理・道徳を基礎とした考え方、さらにそれを踏まえた青年の成長への試み、すなわち「修養する人格」的記述はそれを読む読者に感動的な書物としての位置を確保させた。そしてこのような「感動」はただ志賀的な純粋文学という諸説を支えるためのいい材料として使われてきた。しかし志賀のテクストにおいて読者の「感動」を惹き起こす「人格修養」的な思想は、文学的純粋性への裏

付けとして結論づけるにはあまりにも多くの近代日本の諸相を反映している。このような視点は、今までの志賀文学の神話を支えてきた論考から一步踏み出し、近代日本社会の思想における模範的テクストとして（志賀文学が作家本人も意識しないまま）大きな影響力を行使したものであることを明らかにする。従って本論では「人格修養」を語るテクストが内包している意義を究明し、文学テクストとして「人格修養」を表象している志賀テクストの位相を探っていききたい。

二、「感動」を引き出すコンテクスト

志賀の小説に人々が共感した時期である明治末期から大正期には、個人に対する関心が高まって、アイデンティティの確立が大きな課題として浮上した。とくに子供と大人の「間」的存在であり、自我形成期におかれている青年層にとっては最も重要な課題であった。そして一九一一年以降の「中学校教授要目改定」は、青年の「乱れ」を規制で押さえつけようとすると同時に、その対策の理論的な柱として期待された倫理学の道徳論そのものを、授業を通じて青年たちに内面化させようと目論んだ⁸⁾。このように道徳・倫理的な言説は教育システムに利用され、当時の模範青年像の言説に組み込まれていった。これと

同じような現象が文学の方面にも現れ、「青年たちに道徳的規範を示すための儒教的な文学像という実用主義的な」⁹⁾傾向の記述が求められた。

また、一九〇七年前後には、国家の読書に対する関心が高まり、一九一〇年の読書の取締り政策とともに、青年層や学生・生徒の読書実体調査や奨励図書¹⁰⁾の推薦が実施された。そのため、この時期に東洋の道徳や倫理の観念を西洋哲学とともに今風にアレンジした「人格修養書」は脚光を浴びた。明治三十年代から四十年代頃に出版され始め、明治末期になって刊行の点数が増加していくこれらの書物は、基督教や仏教、禅などの宗教性の強い種類を除けば、殆どが東洋の倫理学に西洋哲学を加味したものであった。「人格修養書」は、道徳・倫理的な言説をベースとした教育のシステムを通して育成された日本の青年読者に、道徳・倫理的な内容と西洋哲学の「自我」「人格」などの概念を導入して、新世代の困難な状況に対する対処法を呈示する形で、読者側の欲求と規制を行なう側双方の要求を適切に充足する書物として浮かび上がったのである。「人格修養書」は若者のアイデンティティの確立に方向性を呈示している。そして明治中期以後に幼少年期を過ごし、大正期になって青年期を迎える若者に、本格的に「自己形成」を助ける媒体になった。

筒井清忠は、「修養主義によって「人格」は本格的に社会意識上重要視され、神聖化され始めた」と指摘している。若者達の内面的自己発見とは自分の「人格」というものの意識化とも言える。「私はどう生きるべきか」、「私はどうあるべきか」という問いに、彼らは自ら答えを与える。加藤咄堂『修養論』(東亜堂書房、一九一三年)には、「修養の要義は己を知るにあり」といい、修養の基本単位を「己」として、修養を通して「個」が分かるという明快な答えを出している。また、春日靖軒編『修養の指針全』(石英堂書房、一九一六年)に、「青年が自己を修養して行く上に於て人格の観念を明かにする事、甚だ必要」であるとされているように、これらの書物は、個人の自我の問題を全面的に取り上げて、新しい時代の風潮に相応しい豊富な内容を提供しているのである。「人格修養書」は、若者の自己発見の対策として最も適合しているかのように働き、享樂的書物との差別化を行い、「堅実なる書物」として確固たる地位を獲得した。そして危険視される思想や性的墮落から隔離される「自己」こそ価値のある人格であると強調している。

「人格修養書」は、個人個人が所有している人格、および人格の運用は所有者の責任であるという立場で記述されている。個人は精神的な自由を得、選択する権利を

獲得した。選択の自由は個人にゆだねられていたが、正しい道を提示する側は別にあった。「人格修養書」には常に修養している個々の人格を正しい人格のあり方と呈示している。個人の人格という、自由に抽象的なものが、修養という明確な方法を通して具体化されていく。そして「人格修養」の目標として示されているのが、「立志」と、それに伴うべき「努力」であった。このように完成されている結果よりも「過程」を大切にしているのが「読書」「勉強」「仕事」「旅行」「運動」等であった。

例えば、加藤咄堂によると、読書がもたらす利益は「意志鍛錬」、「習慣の養成」にあり、読書は「修養の要件」であると述べている。そして重要なことは書物の選択であるが、「成る可く先輩の指導」に従ったほうが「誤る」ことがないと強調している。そして具体的な読書の内容としては、偉人傑士の伝記を読むとか、聖人君子の説を聞くことが最も重要であるとされている。そして「勉強」についても、「修業には勉強が大切と信じた」¹⁵「我が日本人は修業を道として神聖視したによつて其の道を得ようとする為めには中々の勉強をした」という記述や、井上哲次郎『人格と修養』（広文堂書店、一九一五年）の中で見られる勉強法の指導を通して個人の人格

修養の方法を提示している。また、「仕事」をすることの重要性を強調し、青年は「仮令その仕事自分が低いものであると考へても、その仕事を大切に働かねばいかん」と、自分に任せられた「仕事」に充実すべきことを述べている。『修養全集九卷訓話説教演説集』（大日本雄弁会講談社、一九二九年）には、「一旦職業を選んでこれに従事するに於ては、之を天職なりと信じ、渾身の精神を籠めて其遂行を期し」、「人生の最大幸福は、その職業を道楽化する事から生れる」、「職業に興味をもつて、仕事と自分とが渾然と一体となれば、仕事が自分の生命となる」とあるように、「仕事」は幸福の第一条件であるがゆえに楽しむべき事柄として記述されている（すなわち「仕事」の趣味化である）。そして身体と関わる修養の方法も提示されている。例えば、「健全な身体は逆境の中より生ず——昔より「愛子には旅をさせよ」といふでないか」という記述や、「修養を重んじて人格を造り立てると同時に、身体を訓練して増進することを夢忘れてはならない」とされているように、身体鍛錬が働く精神の修養について説明し、「旅行」や「運動」を通して健全なる身体育成と同時に健全なる精神養成が必要であることが強調されている。

「人格修養書」は個々の人間に自分の精神や身体にお

ける自由があり、選択権も与えられていることを前提としている。これは青年達、特に極めて個人的な自立した精神が尊重され始めている明治末期の青年には最大の関心事であった。「人格修養書」が強調している精神の運用についての具体案は、旧来馴染んでいた道徳・倫理的な思想をベースにして個人主義・人格主義といった新しい思想を取り込んでいる。このように自然に慣れている修養的思想と斬新な西洋哲学的思想との接木は若者の共感を得た。従ってこれらの「人格修養」的な思想は近代の若者たちの精神を制御する〈装置〉としての機能を担当することになる。さて近代の青年の個々の精神に仕掛けられる〈装置〉とは具体的にいかなるものであろうか。

三、全体の中での「個人の人格」—— 「人類」という落とし穴

「人格修養書」は個人の人格の修養を強調しながら、個人は一人で立つことが不可能であると記述している。そこでは人と社会とはネットワーク上の関係がすでに形成されており、主と従という関係が反復され、何が主であり、何が従であるかの区別がなくなってしまう関係におかれていると説いている。²²⁾ 従って個人の欲望が社会的

欲望になり、また社会の欲望も個人の欲望になっていく。菅原洞禅『修養十二ヶ月』（松本商会出版部、一九一六年）で、「人生の理想は社会を利益するにある、或は自分の持つて居る所の能力を円満に発達させるにある、或は真の幸福を全うするにある」と、社会の中で自己を円満に発達させていき、真の幸福を追究するのが人生の理想であると述べている。従って教育の方針においても「一人一人を立派な人物に仕上げて行くことを目的」とした、「共存共栄の観念を確と植え付けて行く」²³⁾ことが大切であると、従来の天才教育法から共存共栄へ向けた教育法を重要視している。従って個人の「人格修養」が、家族、社会、国家、人類にいたるまで有益であり、このような人物こそ真の人間であることを述べている。

こういう道徳的な「自己修養」は国家との深い繋がりをもっている。前掲の『修養十二ヶ月』には、国家と個人とは相互に他の発達を助長すべき使命を帯びていることを説明し、「個人は国家発達の必要元素」であつて、国家も亦個人発達の「必要元素」であると記述されている。そしてこの二者は、「道徳的生命を得て初めて生存の目的を達する」とし、国家と個人の関係をイデオロギーで結ぶのではなく、道徳という概念で両者の結束力を強化している。また前掲の『人格と修養』には、「人格は

修養に依つて発展するもの」であるが、そこに「自由」が得られなければ「人格の発展」を遂げることは難しいと述べている。「人格修養」における「自由」の大切さを強調しているわけであるが、こうした「自由」の表象としての人格は、実は「単独で発展を遂げる」ことは難しくしてやはり「道徳の制裁」、「法律の制裁」、「社会的制裁」を免れることは出来ない。「国家」を無視しては人格の形成が難しく、純粹な孤独主義に固執しては「人格の発展」を期待しにくいと説明している。こうして形成される個人の幸せは一個人のものだけに終わるものではなく、漸進的に発達して「世界人類」の「幸福」に貢献するとされている。

前掲の『修養論』には「国民は又更に此の国家を介して天下人類に貢献することを得べきなり」といい、「我が国民の修養も亦唯国民としての修養のみならず、わが国運の発展が直ちに以て世界人類の福祉に貢献するものなるを知らざる可らず」と、この時期の「人類」という概念の扱ひ方の一例を示している。また一九二七年の日本放送協会関東支部からラジオ放送を通した修養講座も行われたが、その教材になる『ラヂオ講演修養講座』にも、自分一人でこの国家をよく背負つて立つといふ決心を以て始めて「挙国一致金匱無缺の日本国」を維持する

ことが出来ると記述している。そして青年読者に「諸君我々は眼を高く遠く、世界人類の平和幸福といふもの、上に注ぐと共に、足を大地に踏みしめて、自分の立脚点を忘れずに進むといふことを希望するのであります」と、「個」の理念が「人類」へ向かう手続きを述べながらその中におかれている「国家」の重要性を述べている。また森田公美は『修養哲学人間読本』（帝國奨学協会、一九二八年）で、「世界の人類が共存共栄する楽園のやうな人類の生存を希望」しているといい、「人類」の中身には「国家、社会、個人」がいて、「国民として社会の一員として個人として尚一段の教養を勧めなければならぬ」と述べている。大正期の「人類」は、国民を構成員とした国家が完成された後に生まれ、国家発展の延長線上にある事柄であった。そして「人類」への貢献と「人類」の平和は、日本の若者達の手にかかっているものであった。前掲の『ラヂオ講演修養講座』には、「何故に我が国のみが、世界人類の歴史の上に、斯の如き特殊なる事実―これを光榮ある特殊といふことも出来ませう、（省略）それは実に、我が国体が万国に優れて、特殊無比なるのに主として因るものであります」とされ、結局のところ、「人類が国家なる団結体を作つて永遠に存続発展」する所に眞の意義があると記述されている。この

ように日本に統一され、一つの理想の国家を建設していく。帝国主義的言説は「人類」という言葉を利用して説明している。「人格修養書」の個人の人格の修養の究極は「人類」の平和と発展にある。ここでの「人類」の平和、発展は、まず日本国民としての自覚がなされてから、やがて成し遂げられるものであった。すなわち「人類」を語るということは、日本国家の発達、進展の上に築かれた理想郷を語ることであり、このような帝国主義的野心からの発想は「人類」という言葉や「人道」という言葉できれいに包装されているのである。このような「人類」や「人道」は文学の方面でもしきりに取り扱われていた。特に大正期に多くの活動をした文学者の集団である白樺派は「人類」や「人道」といった言葉をしばしば使っている。「人格修養書」の語る「人類」は、常に「国家」という言葉や概念が付いていたわけであったが、文学における「人類」は、「国家」のことはいっさい排除された形（むしろ「国家」は「人類」や「人道」とは対概念であるように装う）でテクストの内容の展開が進められるのである。そして文学的な要素、あるいは小説的な要素——例えば、恋愛・友情・性欲・信仰・真理・善など——と、「立志」「努力——勉強、仕事、旅行など」といった文学的キーワードが上手に絡み合い、昇華された形と

しての「人類」「人道」が提示されるのであった。このような「人格修養」的な思想を文学的な形で体現したのが大正期の所謂教養主義者と言われたグループであり、なかでも白樺派の同人の創作活動は大きいものであった。

四、教養主義の本質と「人格修養」

教養主義は旧制高校生ら学歴エリートの中核的文化であるが、これらの教養主義者というのは明治末期の修養主義の影響圏から輩出された人達であった。唐木順三によると、ケーベル・夏目漱石・西田幾多郎の影響下で成長を遂げた大正期の知的集団をさす。彼等の理想はやはり「人格修養」であった。彼らの思想の根底には、「我」に最高の価値をおき、「自我の要求」と「その要求を満たすべき実在」の融合一致を努めることによる「理想的な人格の達成」があった。また文学の方面では武者小路実篤・志賀直哉・里見弴などの白樺派の同人が、漱石との人格的・倫理的な紐帯で繋がっている。教養主義者が問題にしていた青年の自我形成の問題、精神の成長の問題は当時の若者達に大きな影響を及ぼした。その代表的なものとして『三太郎の日記』は若者の彷徨と煩悶、自我確立の問題を取り扱っていて、このような内容の小説的体現が志賀の『暗夜行路』である。そしてこのような

種類の書物が「戦前までは旧制高校生の間で教養の書として」むさぼり読まれた。²⁶⁾

教養主義者によるテクストが青年達を引き込む力がそこにあったわけである。彼等の作品は、善・真理・友情・恋愛・性欲・信仰など青年の関心事を重要問題として扱っているし、西洋の論理と東洋の倫理は矛盾対立することではなく、高次の次元に高められ、悠々、透明な調和の美が発揮されている。そして日露戦後の「自己」をめぐる言説の中で見られる「自己の探究論」の内実には、つねに「自己」を「拡充」「発展」していこうという欲望が存在しているという。そしてそれを体現した人として安陪能成・啄木・白樺派の同人がいる。²⁷⁾

教養主義者は、その欲求の大きな枠を「人類」と「人道」という抽象的な言葉で表現しているが、池田浩士は、教養小説の本質は、ただ単に、ひとりの個人の自己形成の過程だけではなく、その個人の歩みを潜在的にもせよ支えるものは、社会現実に対して向けられた目であり、社会的現実のなかで個人はいかにして意味ある生を営むかというところであると指摘している。²⁸⁾ すなわち教養小説は、社会現実の中で個人が自己をその社会の中でいかに表象していくかという重要な課題に対する答えとして取り扱うべきである。アナキスト達・プロレタリア作家

達・自然主義者達が混在している中で彼等が取った自分の立場というのはいかなるものであったのであろうか。それはまさしく倫理・道徳的な立場であり、個から出発して家庭から社会、国家、人類へと繋がっていく「人格修養」の立場の延長線上にあった。

筒井清忠は、教養主義は明治末期の修養主義を具体化・精緻化したものであり、修養主義のリメイクであること²⁹⁾を的確に指摘しながら白樺派との関連を述べている。白樺の同人の活動は、明治末期から大正期にかけて、文学方面を代表していると言っても過言ではない。彼等は個人主義・人道主義を提唱しながら創作活動や個人的な活動をしていた。そして彼等が主張していた人道主義は、自己を生かし、趣味をいかした健全な仕事につくことを大切にし、他者との精神的な交流を通して人類の幸福への追求することが目標であった。彼等の主張の内実にあるのは「読書」「勉強」「(趣味を生かした)仕事」「人類」「人道」であった。この内実の実現は「人格修養」の提示している具体案と通じている。換言すると「内面化された人格修養」であったわけである。「人格修養書」が求めている中核、即ち若者のエネルギーの利用(倫理化・道徳化された「立志」「努力」――読書、勉強、仕事など)「社会・国家への貢献」のプロセスに参入する模範青年

の理想についての言説)は、文学の方面で内面化された形で実現されていたのである。白樺派の活動は、社会のイデオロギーに囚われず、そして文壇で流行していた自然主義とも自分達を区別しようとした。それゆえに個人の精神が生かされた、より高い理想を求めていたわけであった。このような傾向を持っていた人達は教養派の一部として取り扱われたが、唐木順三は『現代史への試み』(筑摩書房、一九四九年)で、彼等の豊富な読書、文学と人生論についての考察は、人類と個性、普遍と個を問題にすることで、国家・社会・民族などは問題にならなかったと批判している。

しかし国家・社会・政治・経済・民族の問題がリアルな形で描かれていないということだけで、それとは無関係なものであると断言できるだろうか。彼等の主張の中心にある「人類」「世界」「人道」が表わしている同時代的コンテキストを見過ごしてはいけない。何故ならば文学的教養派である彼等の思考の根幹には、「人格修養」における重要思想である道徳・倫理・西洋哲学が核心になっているからである。

特に志賀は、漱石の明治の精神をバック・ボーンとする倫理観・道徳観をもとに統一的な人間像を認め、尊敬していた。長谷川泉は中核となる教養派からは創作の面

での実践的な活動者が出るのがなかったと指摘しているが³⁰⁾、志賀直哉の青年物には、修養主義を根幹にして構築された教養主義者の姿が照し出されている。

五、志賀直哉の文学的基盤からみた修養主義的特徴

志賀は、「文章はまるでちがうし」「小説も自分と合はぬ」ものがあるが、「作者としての道念」というものの影響が一番強かったのが漱石であると告白している³¹⁾。彼において漱石は「一番好きな作家」であり、人間的な深い敬意を抱いていた人でもあった。漱石と志賀を繋ぐ回路は、やはり倫理と道徳といった東洋学の基盤になる概念であり、志賀はその「精神」を受け継いだのであった。そして志賀の個人的な記録にも、倫理・道徳的な思考は反映されている。志賀の書簡やノート、日記など個人的な記録をみると、その「精神」が鮮やかに示されている。志賀は自分の中の両面性——「動物的」「本能的」「世界的」対「理性的」「趣味的」「道徳的」³²⁾——を発見しながら前者の特性をもつ自分を嘲笑的に眺め、戒めている。このような思考は、他人の文学を批評する際にも適用し、他者の作品を読むとき作家の人情が感じ取られるところに感動する³³⁾。また「一番大事な事は一流の人間

になるといふ意志だと思ひます」「真剣である事、努力である事などはそれから生まれて来ると思ひます」といった記述などから、正しい人格をもってそれを発展させていくところに文学の意義を見出している。そして自分の文学についても、青年の仕事上の進歩への崇高さを述べている。

志賀は他人の文学を評価する際にも人間の成長が含まれている文学に重点的な価値をおいている。そして志賀が選択する成長の方法として代表的なのは「仕事」である。とくに彼の日記には彼の「仕事」への意志が鮮明に描かれている。前述したように彼は「仕事、——人生（自然）への執着」と表現し、人生を自然と同概念として取り扱い、人生への執着を「仕事」という言葉で表象していた。執着というネガティブなイメージで捉えられやすいが、ここでの執着というのは成長への試みとして言い換えられる。一九二六年の日記などを見ると、作家において書くことは人生をさとるために大切なことであることを強調し、この文章に続けて「精進・努力・明智・恋愛・自由」といった言葉を連ねている。また志賀は、知識を得ることは大事だが、それ以上に「大いなる人格」を得ることは「自由」を得ることであると告白し、成功より「人格修養」が大切であることを強調している。

志賀の頭の中には天才的人物への憧れというより、「人格修養」を通じた「人格的人物」になろうとする願望が明確にあつたわけであつた。

そして志賀が追究している〈青年像〉からは、前述したような志賀の精神を裏付けるような記述がなされている。志賀は「新作短編小説批評」で、森鷗外の「花子」への感想を、「青年がこれから生涯勉強しようとする神明に誓つたやうな心持がしたいといふ条などは青年らしい心が現れる」といい、青年が強い意志を抱いて努力する姿に青年らしさを発見している。そして志賀の手帳などをみると、青年は「不可能」を「可能」に変える力強さを所有しているものとして表現されている。志賀の〈青年像〉を描いた具体化されている記述が、一九〇七年一月二十三日の手帳六に表されているが、そこには「〈勉強（仕事）〉↓〈苦難〉↓〈良心の満足〉↓〈人の進歩〉」という、志賀テキストにおいて典型的な青年の成長のプロセスが伺える。そしてこのようなプロセスは「健全な身体」の上に形成されることを志賀は強調している。志賀は、「人格修養書」にも頻繁に使われる「健全」という言葉を用いて、「健全なる思想は健全なる身体に宿る」といった身体と精神への管理する表現を持ち出して、その重要性を示唆している。また彼は「愛情のない肉欲は

嫌悪を生む」と、「健全」ではない肉欲を軽蔑した。

以上のように、志賀のテクストは、政治的表現や社会性の強い言葉を含まない。そして志賀はあるイデオロギーの中に収斂されることを極端に嫌ったと告白している。

従って志賀と彼の作品に対する評は、社会全般の状況に對して、閉鎖されている個人的なものとしか受け止められなかった。しかし志賀は同時代の「人格修養」的な思想の〈装置〉⁴⁰に当てはまる思考をし、そうではない自分との格闘を続けていたのである。

志賀が描いている作中の中心人物は主に〈青年〉である。ここでの〈青年〉は同時代に存在した諸条件や諸制度、一般化していた表象形式などの規制の下で自発的にもあり得る諸実践を通して、遂行的に構成され、それに支えられた存在であった。⁴¹この青年は常に「何かやらなければいけない」というエネルギーの中心に据えられている。そこから小説が発見して、それに対する「志向」が綴られていく。これは「君は大きくなったら何になるんだい？」⁴²といった自我実現のための質問に対する答えとも言える。また青年の敏感な問題である性欲においても、道徳的な立場で出す答えや、家族との関係の中で形成されていく倫理的な解決策からも、志賀のいう「人生」へのエネルギーを感じさせる。即ち志賀のテクストは、

青年の主体形成に関わる一番根本的な問題に対する疑問と対策を提示しているのである。そして当時の読者の納得を一番得られる答えを用意している。また当時の文脈から受け止められる志賀文学への「感動」の特徴には、「感動」が一回性で終わってしまうのではなく、新しいエネルギーとして活用されるという点にある。このような志賀のテクストにおける「人格修養」的な特徴は、文学的な形態をもっているながら当時の若者の精神をリードし、日本「国家」発展の原動要素を生産させる役割を担当する。

*

赤木桁平は、「自己建設と自己築造とに向けられたる志賀君の一步一步には、必ずこの努力に伴随する一種の「戦ひ」があり、兼ねてこの「戦ひ」に打克つて行くに足る意力の勝利がある」と志賀文学を評価している。⁴³ここでの「努力」に随伴する「戦い」は、そのまま近代日本の青年としての自己形成への「努力」であり、「戦い」である。そして、その根底には修養主義が潜在している。そして修養主義が含有している修養の方式をも吸収し、主人公に内面化された形で支配文化の欲望を表している。ここで「人生そのもの」が鮮明に描かれ、「感動的」書物

として作り上げられ、読者によって再生産される形で、
〈利用〉の価値の高い書物としての志賀のテキストに対
する意味付けが可能である。

志賀のテキストは近代青年の自己形成に関与している
し、それが青年修養と非常に深い関わりをもっている。

このような「自我形成」あるいは「主体形成」というの
は一見「自己形成」する本人から能動的に行なわれるべ
きものとして認識され、思い込まれている。しかし
「主体形成」の背後には様々な歴史、文化、社会的状況
に取り巻かれていて、主体の自由に任せられつつ、それ
ぞれの温度差をもって影響する。しかし様々な状況には
「国家」やそれが持っているイデオロギー的な〈装置〉
が据えられる。それは明治末期の「人格修養書」や修身
の教科書などが発信しているのは「修養する主体になれ」
という命令であった。ある意味でその命令の下に近代の
「個人」は必死になって「主体形成」に励んだのである
う。「主体形成」を〈営む「主体」〉は、もう〈命令の装
置〉に含まれていくことと同じようになることであつた。
志賀のテキストには〈営む「主体」〉が鮮やかに描かれ
ている。そしてこの〈営む「主体」〉を語る文学は「感
動的な書物」として読者に受け継がれ、再生産されてい
くのである。

〈注〉

(1) 一九一四年一月二十五日付志賀宛有島武郎封書。

(2) 一九三一年七月二十日付志賀宛武者小路実篤封書。

(3) そして犬養は「京都行き熱が起きました」(一九二
二年の二月一日)とあるように旅行への情熱を刺激された
りもしている。また「僕は来年初強したら、仕事に土台が
出来さうで、その点、気が張つてゐます」(一九二四年十
二月十七日の書簡)と自分の仕事への決心を志賀に寄越し
てきたりしている。また武者小路も「本當にかつちりした
仕事をしたい。一言一句、ほりこんだやうな創作をしたい」
と、自分を励ましている。そして芥川龍之介の「齒車」
〔文芸春秋〕第五卷第一〇号、一九二七年一〇月)の中
でも志賀の『暗夜行路』は感動的書物として扱われているよ
うに、別の作家の小説の物語世界という形でも、志賀の小
説は再生産されていく。

(4) 大野亮司「神話の生成——志賀直哉・大正五年前後」

〔日本近代文学〕第五十二集 一九九五年五月。

(5) 永井善久「志賀直哉」の芸術——文学職業化時代の
「芸術家」——〔日本文学〕一九九九年十二月。

(6) 小林秀雄「志賀直哉——世の若く新しい人々へ」〔思想〕
一九二九年十二月。

(7) 志賀直哉の一九二二年(日は未詳)のノート十一〔志

賀直哉全集第十五卷』三三〇ページ)。

- (8) 日比嘉高「〈自己〉を語る枠組み——中等修身科教育と〈自我実現説〉——」(『国語と国文学』二〇〇〇年七月)

- (9) 中根隆行「語られる青年文化、〈地方〉、自然主義現象」

『明治期雑誌メディアにみる〈文学〉』筑波大学近代文学研究会編 二〇〇〇年六月)。

- (10) 永嶺重敏「雑誌と読者の近代」(日本エディタースクールの出版部 一九九七年七月)。

- (11) 筒井清忠「日本型「教養」の運命」(岩波書店 一九九五年五月)。

- (12) 高市豫興『修養立志編』(修文館 一九一〇年、一九一一年再版)。

- (13) 高木喬堂『教訓道話美談逸話修養日訓』(東京中央出版社、一九二八年)には「現在向上といふものに対して一番大切なものは何であるかといふと、志を立てると云ふことであると思ひます」とされ、修養に於ける「立志」の大切さを表現している。「人格修養書」のいう志を立てるといふことは、個人の満足に終わってしまう自閉的なものでもなく、立身出世といった世俗的なものでもない、実社会や自分以外の人間と深い関わりがある。

- (14) 高木喬堂『教訓道話美談逸話修養日訓』には、「諸君よ。偉大なる人格は、困難艱難と戦ひ、最善の努力によりて得

たる最後の勝利によつて築かれる、努力は人類生活の要素である」といい、「志を立てて努力すること」が人格修養の道であると述べられている。

- (15) 加藤咄堂『修養論』(東亜堂書房 一九一三年)。

- (16) 春日靖軒編著『修養の指針』(石英堂書房 一九一六)。

- (17) 井上哲次郎『人格と修養』には、青年学生の勉強法(其一) 学生の勉強法(其二) 学生の勉強法(其三) という項目をたてて、詳しく説明している。

- (18) 大日本家庭協会『現代大家文章と修養』(大日本家庭協会 一九一五年)。

- (19) 村上專精『通俗修養論』(丙午出版社 一九一二年)。

- (20) 注(13)と同書。

- (21) また『修養全集十一卷 処世常識宝典』(大日本雄弁会 講談社 一九二九年)などでも「旅行の心得」、「登山の心得」、「スポーツの話」等の欄を設けて修養と旅行を関わりさせて身体修養の重要性を述べている。

- (22) 注(15)と同書。

- (23) 注(13)と同書。

- (24) 助川徳是「大正教養派の位相」(『日本学』一九九〇年六月)。

- (25) 大津山国夫「漱石と白樺派」(『国文学解釈と鑑賞』一九八二年十一月)。

- (26) 「大正教養主義」(紅野敏郎『近代文学史2 大正の文学』有斐閣選書 一九七六年七月)。
- (27) 日比嘉高「日露戦後の「自己」をめぐる言説——「自己表象」の問題につなげて」(『日本語と日本文学』三十号 二〇〇〇年三月)。
- (28) 池田浩士『教養小説の崩壊』現代書館一九七九年六月
- (29) 注(11)と同書。
- (30) 長谷川泉「大正教養派の評論」(『国文学』一九六二年四月)。
- (31) 志賀直哉「私はかう思ふ」(『志賀直哉全集八巻』一七八ページ)。
- (32) 志賀直哉手帳二(『志賀直哉全集八巻』五九一ページ)。
- (33) 一九二二年十一月七日舟木重雄宛志賀直哉葉書。
- (34) 一九三〇年四月(日は未詳) 吉岡周夫宛志賀直哉書簡。
- (35) 志賀直哉「人間」の合評家に——『暗夜行路』の批評について(『志賀直哉全集第八巻』一〇三ページ)。
- (36) 志賀直哉「新作短編小説批評」の中で『三田文学』の部分(『志賀直哉全集第七巻』一一三—一四ページ)。
- (37) 「勉強は苦である——常に苦である。勉強といふ感じは克己といふ感じなり、その仕事が何であらうと、やる間苦であれば、勉強若しもそれが楽になつて面白くなると、もう勉強していると云ふ心持ちははしなくなつて遊ぶで居るとがする、(省略) 勉強は良心に満足を与える、(省略) これあつて人は初めて、進むで行きつゝある」(志賀直哉手帳六『志賀直哉全集第十五巻』一一六ページ)。
- (38) 志賀直哉ノート一(『志賀直哉全集第十五巻』二七九ページ)。
- (39) 志賀直哉手帳五(『志賀直哉全集第八巻』六五三ページ)。
- (40) 「装置は本質的に戦略的な性質を備えている。(省略) 装置は、常に権力の働きの中に書き込まれている。しかしまたそこから、そしてそれを条件づけている知の一つの座標あるいは複数の座標に結び付いてもある。そこそが装置なるものだ」(ホミ・K・バーバ「差異、差別、植民地主義の言説」『現代思想』一九九二年十月)。
- (41) 大野亮司「個性」の尊重／「状況」の確認——大正七年前後の「文学シーン」をめぐる——(『日本文学』二〇〇〇年十一月)。
- (42) 志賀直哉『暗夜行路』(『改造』一九一一年一月—一九三七年四月)。
- (43) 志賀直哉『大津順吉』(『中央公論』一九一三年九月)。
- (44) 「新進作家論『白樺』派の諸作家」(『文章世界』一九一六年二月)。

(名古屋大学大学院博士課程後期)